

進化した 富士教育訓練センターを視察

建設産業の広域的な教育訓練施設として技術者・技能者を育成する「富士教育訓練センター」の起源は、一九六三年に設置の「建設省建設研究所中央訓練所」にまで遡る。一九九五年まで建設大学校静岡朝霧校として使用された後、技能者育成に向けた建設専門工事業者の強い要望があったことから、(二財)建設業振興基金が国から土地と施設の払い下げを受け、専門工事業団体が構成する職業訓練法人全国建設産業教育訓練協会が同基金から施設を無償で借り上げて一九九七年三月に同センターを開校した。

安心・安全な社会生活を支えるためには建設業従事者の確保と育成が不可欠だが、建設投資の減少、就業者の高齢化、若年入職者の減少など建設業界を取り巻く現状は依然として厳しく、経営環境の悪化による企業規模縮小のため、日常業務を行いながら教育訓練を行う従来のOJT方式だけでは次世代への技能・技術の継承が

途絶えかねない。そこで、日常業務を一時的に離れて行うOff-JT^{※1}の一層の活用が求められるが、宿泊を伴い集中的に高度な教育訓練を行う大規模施設を個々の企業が保持するのは非効率的である。そのため、特定の施設に機能を集中させ業界全体で支援し共同利用すべく、二〇一三年に国土交通省が同センターの充実強化の具体化に向けた検討委員会を設置、日建連からも委員を派遣して検討を重ねた結果、ハード面での充実強化策の一環として老朽化した施設の建て替えが決定した。建て替えに際しては建設業界全体で財政面の支援を行い、日建連並びに日建連会員企業も資金の一部を拠出した経緯がある。このたび、この新施設での教育訓練の視察の機会を得た。

二〇一七年に竣工した宿泊棟と共用棟には、男性二八三名・女性四三名・講師三〇名が宿泊できる寮や広い浴室、一度に一七〇名が利用で



ベテラン講師による実習

きる食堂などが完備されている。より多くの訓練生を受け入れることができる上、訓練に集中しつつ他の訓練生とも交流が図れる理想的な環境である。今年の二月に竣工した本館と教室棟は、多種多様な教育訓練コースに対応できるよう十八の教室や講堂などを備えている。

一方ソフト面に目を向けると、建設現場で一人前に仕事ができる技術者・技能者を育成する^{※2}という同センターの理念の通り、多様なニーズに対応し即戦力を育てるコースが充実しており、二〇一七年度の実績は四三八コースで受講者数一六、〇四九名、参加企業は八、三三六社を数える。そのうち、同センターを利用した日建連会員企業二〇社を含む総合建設業の延べ人数は、一二、三四七名に達する。

なかでも特筆すべきは、派遣元のニーズに合わせた内容で構成されるオーダーメイド型の教育訓練である。オーダーメイド型教育訓練を依頼するのは、総合建設業、専門工事業、大学、専門学校など幅広く、総合建設業からは、「現場で扱う物の重さや技能者の作業を体で感じ、施工管理のポイント体得に役立ててもらいたい」「ものづくりの基礎を順序立てて具体的に説明することで、品質を保つ能力やコンプライアンスの必要性を理解させたい」など教育訓練に対する様々な要望が寄せられる。それらすべてに対応した独自のプログラムのおかげで教育訓練を受けた社員からの評価は高く、そのフィードバックが次年度以降の更なるプログラム強化につながっていると思われる。

また、今年の七月には、国土交通省中部地方整備局の技術系若手職員を対象とした研修が行われ、鉄筋の組立てや型枠を建て込む作業を体験した。発注者の人材育成に寄与しながら、発注者に現場環境の改善・整備の重要性を肌で感じてもらおう良い機会である。更に、国土交通省からの委託事業として建設作業を文字と動画で詳しく説明する建設技能トレーニングアプリ「建トレ」を開発し、スマートフォンやタブレットなどを日常的に使用する若年層が取り入れやすい、時代に即した教育訓練手段も用意している。施設が充実したことでも多くの訓練生や講師の受入れが可能になり、それに合わせて訓練コ

ースも拡充し続ける。生まれ変わって量質ともに充実した同センターに、担い手の確保・育成に悩む建設業界が寄せる期待は大きい。

技術は見て盗めと言われた時代もあったが、充実した教育訓練を受ければ、希望する誰もが建設技能を習得して建設業に携わることができると。入職前の受講が若年層の入職後のミスマツチやギャップを防ぎ、発注者や元請企業に所属する社員は、建設作業の体験を通して知った技能の難しさや素晴らしさを今後の管理業務に生かしていく。様々な立場の訓練生が集まる同センターが、まさに建設業界の「人」と「人」をつなぐ拠点として、今後も多くの建設人を送り出していくことを期待したい。



教室棟の廊下の「見える化天井」

「人づくりへの熱い想い新たに」
職業訓練法人全国建設産業教育訓練協会
会長 才賀 清二郎

建て替え事業が無事完了しましたことは、関係行政、団体、会員など多くの皆様のご支援の賜と心より感謝申し上げます。約20年前、自ら技能者を育てようという専門工事業者の熱い想いが当センターを実現させました。新施設を前に当時の熱い想いを新たにしています。当センターは、未来を担う技能者・技術者をこれまで以上にしっかりと育てて、建設産業の発展に貢献してまいります。どうか、今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。